

クリスマス、おめでとうございます。今年もクリスマスを静かに迎えることができ、嬉しく思っている。しかし世界では、ロシアのウクライナ侵略戦争があり、イスラエルのハマス撲滅という名目でガザ地区へのジェノサイド攻撃があり、多くの死者を出す悲劇に終わりが見えない。国内では、自民党の国民生活を無視した、醜悪な金権体質が露わになった。権力者たちは人間の命を虫けらのように扱い、また、権力を維持するためには不法に何の呵責をも感じない現状に深い憤りを覚える。

この時、愛と平和の主イエス・キリストのご降誕を祝うクリスマスを迎えている訳で、ルカ福音書が記したキリスト降誕物語からのメッセージを受け止めたいと思う。福音書記者たちはイエスの誕生と生い立ちに史的関心がない。大工の父ヨセフ、母マリア、その子たち、イエスを長男に、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟、そして姉妹たちの大家族であったことを記しているだけである。マタイ、ルカ福音書記者は、主イエスの生涯と十字架と復活の出来事から、この方をキリストと信じ、歴史的な出来事や旧約聖書の証言などを踏まえ、壮大な降誕物語を描いている。降誕物語は史的事実を書いたのではなく、彼らの福音宣教の信仰告白である。その信仰告白に、主イエスの生涯の内実を伝える豊かで、力強いクリスマスメッセージが込められている。

「その頃、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録せよとの勅令が出た(2:1)。」ローマ皇帝から住民登録をせよとの命令が出された。住民登録は徴兵と納税の義務を課すためである。ユダヤ人は安息日には労働しない。兵役に就いても安息日には休むため、徴兵は免れていた。ローマは大帝国を支えるために膨大な費用がかかるので、支配下に置いた国々に納税の義務を課した。その住民登録は祖先の地(いわば本籍地)でせよとの命令であった。ヨセフはダビデの家系であったので、ダビデの町ベツレヘムが本籍地になる。ナザレからベツレヘムまで、80 kmの道のりを、身重のマリアを連れて行かなければならなかった。ヨセフ、マリア夫婦はローマ帝国の権力に翻弄され、理不尽な旅を強いられた。ベツレヘムに着くと、同じような人々が大勢いて、宿を取ることができず、家畜小屋に泊まった。そこで、マリアは初子の男子を産み、産着にくるんで、飼い葉桶に寝かせた。主イエスは人々から排除された家畜小屋で生まれ、飼い葉桶に寝かされた。神の子イエスは誰からも知られない世界の片隅、抑圧と暗闇の中で生まれた。これは、そのまま主イエスの生涯を表している。しかし、この家畜小屋は神の愛が注がれる輝かしい場に変えられた。主イエスは居場所を失った「罪人」と烙印された病を負う者、売国奴となじられた徴税人と交わり、彼らを尊厳ある人間として回復させた。人が落ち込む暗闇を光に変えてくださる逆説が、ルカの伝えるクリスマスメッセージである。主イエスは「飼い葉桶から十字架」の生涯を歩まれた。それは、人を愛し、ご自分を献げる一途な歩みであった。

一方、時のヘロデ王は新しいユダヤの王が生まれたと聞いて、軍隊を遣わし、ベツレヘムの2歳以下の男児を悉く虐殺した。彼は有能な政治家、行政官であったが、猜疑心と権力欲に凝り固まり、自分の妻や子どもさえ殺害する王であった。男児殺害の記述を聞いて、彼ならやりかねないと誰もが思ったであろう。ヘロデは自分の権力を維持するためには、傍若無人に殺害する人で、人間の魔性を映し出す人間を象徴している。「飼い葉桶から十字架」の道を歩まれた「主イエスの道」と人を虫けらのように扱う「ヘロデの道」は真逆である。歴史は主イエスの道の勝利を証明している。クリスマスは暗闇を光に変えた「飼い葉桶の幼子イエス」を迎え、愛の勝利を信じ、望むことである。